

5) ベニバナ=紅花

ベニバナはキク科の二年草で南ヨーロッパから中近東、インド、中国などで栽培されており、原産地は西南アジアともアフリカともいわれている。高さは1mほどになり、茎は白色で上部は分枝する。葉は互生し葉の縁は鋭く切れ込み、先端は刺状になる。夏、茎頂にアザミに似た形の黄色の管状花が集まった頭花をつける。花は咲き進むにつれて濃度を増し、やがて橙色になる。和名の由来は紅をとる花の意で、花からは紅色の染料を作る。別称としてクレノアイ(呉藍)、クレナイ(紅)などの他、『源氏物語』にも登場する「末摘花」(スエツムハナ)などである。クレノアイの呼称は、古く大陸にあった「呉の国」から渡ってきた「藍」という意味で、これがクレナイ(紅)に変わったというわけである。学名は『*Carthamus tinctorius*』で、属名はアラビア語の染めるに由来し、種小辞は「染色用の」という意味である。またイギリスでの呼称は『safflower』、中国では『紅藍花』または『黄藍』である。

紅花栽培の歴史は古く、エジプトでは紀元前2,500年頃には栽培されており、その頃に埋葬されたと思われるミイラは、紅花で染められた布地に包まれていた(05-02-21 クミンの項参照)。またB.C.1539年に世を去ったという、アメンホテップ1世のミイラには、紅花が添えられていた。一方ディオスコリデスの『薬物誌』には、『Cnikos』という植物が登場し、古代ギリシャではその種子をつぶして油を採取し、便秘の薬にしたことが記録されており、これが紅花であった可能性が高い。しかしヨーロッパに普及したのは遅く16世紀になってからのことで、アメリカ大陸にはスペイン人がまずメキシコに伝えた。1950年頃になるとカリフォルニアでは、紅花の大規模栽培が行なわれるようになった。現在では紅花は突然変異で生まれた、刺のない品種を主に栽培しており、鑑賞用の切り花にもされている。しかし直根性で移植はしにくく、直播きにするために、家庭栽培用の苗はほとんど売られていない。

紅花が中国に伝わったのは3世紀の三国時代、張華(チョウカ)の『博物誌』によれば、漢代に西方に使いした張騫(チョウケン)がシルクロードを経てもたらしたとされている。6世紀になると『齊民要術』(セイミンヨウジュツ)にも登場し、栽培法や染料の作り方、さらには種子の油を、灯明に使うことができると記されている。

日本に紅花が伝わったのは6~7世紀ごろの飛鳥時代、推古天皇の頃に朝鮮半島を経由して伝わったとされている。しかし6世紀中頃のものと思定される『藤の木古墳』からも紅花の花粉が出土しており、もっと古い時代に伝わったものと思われる。『万葉集』には「くれなゐ」とか「すゑつむはな」として詠まれているが、植物そのものを歌ったものはなく、染料の名として、または色の呼び名として歌われたものである。

よそのみに見つつ恋ひなむ紅(くれなゐ)の 末摘花の色に出(い)でずとも

平安時代になると「くれなゐ」は色の名として、また「すゑつむはな」は、植物名として定着していった。『古今集』には

紅(クハ)の初花染めの色深く 思ひし心我忘れめや
 というように恋心を紅花とかけて詠ったものが多く見られる。

紅に染めし心も頼まれず 人をあくには移るてふなり
 とも詠われており、「あく」は「飽きる」と「灰汁」との掛け詞になっており、これは紅花が灰汁媒染により染められ、色が褪せるとされていたことによるものである。

『源氏物語』の「末摘花」は、常陸宮の晩年の娘で、この姫の鼻が赤かったので、末摘花に例えている。物語中、唯一の醜女として光源氏の衰れを誘ったことで知られており、この姫は醜貌だったばかりでなく、古風で現実生活に適応しがたい無器用さもあった。光源氏はこの女性にある種の不憫さを感じ、終生面倒を見ることになったわけだが、ここに光源氏の単なる色好みではない人間性が、いわば作者の哲学が見え隠れしているのである。また芭蕉の『奥の細道』の中には、

眉掃(マユ)きを 俤(オモケ)にして 紅粉(ベニ)の花

行く末は 誰(タ)が肌ふれむ 紅の花

という句が詠まれている。現在の山形県あたりで詠んだもので、この地は江戸時代に著わされた『和漢三才図会』(ワカンサンサイズエ)にも紅花の産地として記され、現在でもこの花の生産は受け継がれ、山形県の県花にもなっている。

紅花の採取は朝早く行なう。これを乾燥させたものを『紅花』(コウカ)、もしくは『紅藍花』(コウランカ)といい、漢方では通経、鎮痛、月経不順、月経痛、産前産後の浄血や打撲傷、腫物などの治療に用いられる。

紅花から色素をとる方法は、紅花を乾燥させた物に清水をかけて、黄色の色素サフロールを溶かし出し、これをよく腐熟させて餅状となったものを丸めて天日干しにする。これを『紅餅』といい、灰汁につけると紅色の色素カーサミンが溶け出してくる。さらに梅酢や米酢などの酸を加えると、カーサミンが沈殿してくるので、これを原料として、日本の伝統的な口紅や頬紅を作ったのである。染料の乏しかった時代、紅は特に珍重されて、布や紙、食品の染色にも用いられた。江戸時代には「紅屋」といわれ、紅色に染色する商売があったが、化粧品の紅を売る店も「紅屋」と呼ばれていた。当時、江戸では「玉屋」で売る『紅』が最上とされ、特に『玉屋紅』ともいわれ、若い女性の憧れであった。また薬指のことを「紅差し指」ともいった。口紅を塗るときに、今のようにスティック状になってなかったもので、薬指の先につけて、これを唇につけたからである。しかしもっと時代が下ると「紅筆」などが商品化されて、これを用いるようになった。

紅花の白色の果実からは脂肪油が採取され、これは『サフラワー油』と呼ばれ、燃やした煤からは『紅花墨』(コウカボク)が作られて書に用いられた。また紅花の脂肪油はリノール酸を多く含み、コレステロール過多による動脈硬化の予防に効果があるとされている。このため最近では高級な食用油として脚光を浴びている。



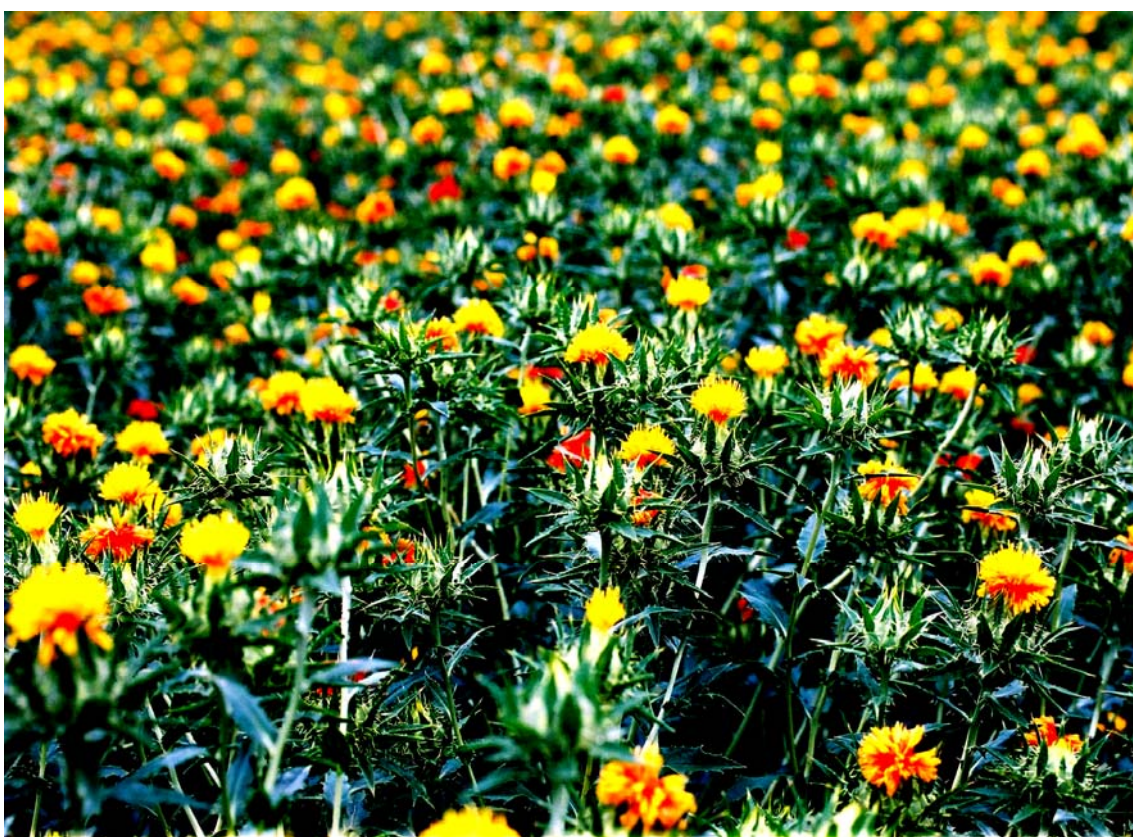
ベニバナはキク科だけあって、タンポポやキクの花にもよく似ている。しかし咲いてからしばらくたつと、花は赤みを差して『未摘む花』に変わってゆく(埼玉県深谷市)。



ベニバナの花、開花すると次第に赤みを増してゆく(群馬県高崎市染料植物園)。



ベニバナの蕾から開花直後の花、咲き進んだ紅色の花。とりどりである(埼玉県深谷市)。



ベニバナ畑(埼玉県深谷市=現在は大きな商店ができて今はもう見られない)。

[目次に戻る](#)